

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 過去を失い強さを求める者 ~

夜明けの八咫鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 過去を失い強さを求める者

### 【Nコード】

N0417Y

### 【作者名】

夜明けの八咫鳥

### 【あらすじ】

少年は力を求める。その思いが何から来ているのか、記憶喪失の少年には分からない。力を求めている内に記憶が戻ると思い、少年は戦いに身を置く為機動六課に入る。ある日、知らされた真実に少年はどう動くのか。

## 1話（前書き）

これは黎音と光鴉の合作二次創作になります。黎音が設定と大まかなストーリーを考え、光鴉が文を書くという作業で作っています。

タグに“ロックマンエグゼ”、“フォルテ”とありますが、ロックマンエグゼのフォルテが出るわけではありません事を記載しておきます。

そんな方のみ本文へ、どうぞ。

## 1話

ミッドチルダのとある廃墟群に二人の少女と、一人の少年がいた。背景が荒廃としているのに、若さに溢れた存在がいるというのは何とも言えないミスマッチ感がある。三人がゲリラの構成員ならば何も問題はないのだろうが、表情からそんな物騒な組織に所属していない事が見て取れる。

ならば何故こんな場所にいるのか。

その疑問に答える前にまず魔導師ランクというシステムについて記そう。魔導師個人の資質と能力を位ごとに分けた物だ。これは個人の實力を判断する目安となっており、重要なポストに就く時等に必要とされる。そして基本的にランクアップする時は試験を受けなくてはならない。

つまりこの三人は、自分達の魔導師ランクを上げる試験を受けに来たのだ。

3

「ティア、こっちがフォルテ。でフォルテ、こっちがティアだよ」

「あんたがスバルのところに世話になってるフォルテね。あたしはティアナ・ランスター」

「フォルテだ」

それぞれが自己紹介をする。元気ある少女がスバル・ナカジマ、クールな少女がティアナ・ランスター、どこか人を寄せ付けない雰囲気を持つ少年がフォルテ。

「俺が世話になってるのを知つてるとなると……」

「記憶喪失の事も聞かされているわ」

聞いているのではなく、聞かされている。

どうやらスバルは記憶喪失という、普通なら話さないような事をティアナに言ったらしい。それを聞くなりフォルテはスバルの口の端に指を入れ、口よ裂けよと言わんばかりに左右に引っ張る。

「いひやいいひやい」

「一応知ってたが、お前にプライバシーという言葉がインストールされてないのが良く分かった。このまま口が裂けるがいい」

「あんたの発言も分かるけど、そこまでにしなさい」

言われてすぐに指を抜く事から、本当に口を裂こうと思つてなかつたみたいである。だが、スバルに向けていた怒気は本物で、スバルは自分が口裂け女になる覚悟をしていた程だ。自分が知らない所で自分の秘密にしておきたい事を話されたら誰でも怒るだろう。

二年前、無人世界でフォルテは行き倒れて気を失っていたところを、スバルの父ゲンヤ・ナカジマに拾われた。目を覚まし体力が戻ってきたところへ、ゲンヤから何故無人世界にいたのかを質問され、思い出そうとして思い出せず自分が記憶喪失だと知る。思い出せたのは自分の名前がフォルテである事、持っているデバイスの名前がゴスペルである事、どんな魔法が使えるのか。後は何も思い出せなかつた。病院で入院して何日も過ぎたが、フォルテの親は現れるどころか見つからずゲンヤが身柄を引き取り今がある。これがフォルテの過去だ。

「しかしスバルもよくあんな奴と一緒に暮らせたわね」

さっきの怒気に少し当てられたのか、ティアナが苦い顔をして言う。それだけフォルテは過去を、本人の意思とは無関係に話された事を怒っていた事が窺える。

「それはあたしがフォルテの逆鱗に触れたからだよ。いつもはも

つと優しいんだよ?」

「その疑問系はどっちの意味かしらね」

二つの意味に取れる疑問系をティアナは、否定・仮定の疑問系だと判断した。

恐らくフォルテは息をするように、気に入らない相手を殺すといかないまでも潰せる。そんな危険人物だとティアナは思っている。

だがスバルは一緒に暮らしていたから、フォルテがどんな性格かを理解しているつもりだ。フォルテは自分に過度の接触をしようとする者を激しく嫌い、他人にあまり関心を持たずないが、困っていたら何も言わずに手助けするぶっきらぼうな性格なのだ。

しばらくして試験の時間がやってきたのか、三人の前にモニターが現る。その向こう側にスバル達よりも幼い少女が映っているが、もしかしてこの少女が三人の試験を受け持つのだろうか。

『はい、皆さん準備はいいですか?』

モニターに少女しか映らない事から、どうやら本当にこの少女が試験管らしい。

『今回の試験管を担当いたします、リインフォース? (ツヴァイ) 曹長であります。よろしくです』

試験管によると、制限時間内に廃墟内に展開させたターゲット全てを破壊し、所定のポイントに辿り着く事が試験の内容らしい。中にはダミーもあるので気を付けるとの事。順番は最初にスバルとティアナ、次にフォルテが一人での事。明らかにフォルテだけが難易度高いので、フォルテの時はターゲットの数を減らすらしい。

「別にそんな配慮はいらん。スバル達と同じ数にしる」

『で、ですがそういう風にしろと言われているですよ』  
「ならば言った奴に確認を取ればいいだろう。俺は一人でも十分強い」

鋭い眼光がリインフォースを貫き怯むがなんとか持ちこたえ……  
……られなかった。すぐに上官と思わしき人物に連絡を取り、話がついたのか怯えながら振り返る。

『お、オーケーが出ましたけど本当に良かったですか？』

「お前が気にする事じゃない」

今のは恐らくリインフォースに余計な心配をかけまいと、自分が勝手にした事だと言っただろう。だが、あまりにも不遜な言葉に余計に怯えてしまった。

スバル達の試験が終わり、少しのインターバルを置いてフォルテの番が来た。

同じ内容の為ターゲットの位置は変えてあるとリインフォースが言うが、試験を見ていなかったフォルテにとってそんな事はどうでもいい。位置を変えるだけでなく、ターゲット自体をもっと強固な物に変えろと思ったぐらいだ。

首からかけているネックレス型のデバイス　ゴスペルに触れて  
眩く。

「セットアップ」

バリアジャケットであるボロボのマントを羽織ったフォルテがそこにいた。鋭い眼光とフォルテの持つ雰囲気ボロボのマントと合い、彼を見る者達全員に恐怖を与える。

四肢に力を溜め試験開始と同時に爆発させて駆け出す。かなり力を開放したのか地面を蹴った部分が抉れ、抉れた地面の破片が弾丸と化して逆方向へと飛んでいく。

ターゲットを発見したのかフォルテの右腕の右腕に集まり、それを無造作に振るって魔力弾を放つ。放つとほぼ同時に爆発音が響き、ターゲットらしき物が上半分吹き飛んでいた。

シューティングバスター。

フォルテが使う魔法の中で一番威力が低い魔法だが、その分発射速度と連射速度に重点を置いており、並みの魔導師では回避するのが困難な程である。

「脆いな……………。いや、Bランク試験だから仕方ないのか」

魔導師ランクにおいてBランクは中の下に対応している為、その分試験も簡単なのだろう。しかしそれがフォルテの機嫌を悪くしていた。一応自分の意思もあってこの試験を受けにきたのだから、文句はなんとか飲み込み、難易度が高い試験は後のお楽しみと考える事で溜飲が下がった。

次々にターゲットを破壊していく中、まだダミーは一つも破壊していない。一人で戦い、ほぼ振り向く事もなく破壊しているから一つぐらいは、と見ている者達は思うがそんな気配は微塵も見せない。

『グルルルウ』

「ふん、お前も暴れたいのか。いいだろう、どうせ知られる事だ」

急に立ち止まるなりマントを脱ぐと、そのマントが巨大な狼に姿を変えた。だが、本物の狼ではない。体毛はなく、星空のような色

をした体に、棘のような鬣が首から生えているのを狼とは呼びはしないだろう。

ゴスペルは三つの姿を持つデバイスである。待機状態とバリアジヤケット状態、そしてこの戦闘状態。これは他のデバイスにはない特性で、何故このような姿が取れるのかいまだに解明されていない。分かるのはゴスペルが戦闘状態になると、フォルテが使えていた魔法のいくつかが使えなくなるという事だ。

デバイスとは魔法の補助をする為の機械である。それが手元を離れるとなるとデメリットしかないが、フォルテはゴスペルなしでもシューティングバスターや移動魔法ぐらいは使える。だからこの場合は単純に戦力が増したと考える考えていいだろう。

黒い巨躯が駆ける。戦闘状態になる前にターゲットとダミーの情報をインストールしていたのか、その爪と牙は主人同様にターゲットのみを破壊していく。

ゴール地点でフォルテの行動を見ていたティアナは驚いていた。本当に一人で自分達と同じ数のターゲットを破壊し、なおかつゴスペルの存在にだ。

「スバル、彼が出したあの狼を教えてください？」

「良いですよ、なのはさん」

スバルに話しかけた彼女の名は高町なのは。管理局員の中で最も知名度が高い上、実力もまた高いのでエースオブエースという異名を持つ。ちなみにとある事情からスバルの憧れの人である。

「あの狼みたいのはゴスペルって言って、フォルテのデバイスです」

「使い魔じゃなくてデバイスなの？」

「はい。詳しい事は分からないんですけど、ああいう風になれるんです」

一種のユニゾンデバイスかとも思ったが、それはないとなのはが頭を振る。ユニゾンデバイスは通常の間人型か、飛行能力をもった小人型の二つしか存在しない。またデバイスと融合する時、所有者のバリアジャケットや瞳などの変化するのだが、フォルテがセットアップした時にそのような変化は見られなかった。

性格に難ありだが、そこは個性として考えれば管理局にとって有用だと考えながら見ていると、フォルテがこの試験最大の難関と対峙していた。残るはこのターゲットのみらしい。

「やった！」

最後のターゲットも相手にはならず、接近したフォルテが右腕に作った黒い魔力刃で切り裂いた。難関を突破したにも関わらずその表情は変わらず、破壊出来て当然といった空気を放っている。

そしてフォルテが時間を沢山残してゴールした。余談になるが、後にフォルテのタイムを更新出来たのは誰一人としていない。

「ミスもなし、時間も余裕を残してますので、フォルテさんは合格です」

「は、という事は落ちたのか」

睨み付けているつもりはないのだろうが、睨み付けているかのような鋭い視線がスバルを貫く。その視線にスバルの言葉が詰まり、一歩後退する。

「でも、君も問題ありだよフォルテ君」

「誰だアンタ」

いきなりなのは話しかけられ、敵意を向けるフォルテにスバルが慌てる。相手は二人の上官な上、スバルにとって憧れの人なのだ。家族が失礼を働くのはいただけない。

「駄目だよフォルテ。相手はなのはさんなんだよ？」

「初対面の相手に自己紹介もせず、いきなり説教をするのは失礼じゃないと？ エースオブエースだから許されるとも思っているのなら、管理局も落ちたな」

「フォルテ！！」

大声で止めようとするスバルだが、フォルテの敵意は消えない。ティアナもフォルテを止めようと言葉を探すが、フォルテが言っている事もまた正しいので見つからないでいた。だが、なのはが怒る気配はない。

「君の言うことも正しいね。私は高町なのは、階級は一等空尉だよ」

「フォルテだ。呼び捨てでいい」

自己紹介を終えたところで、ようやくフォルテが敵意を消した。

「それで、俺の問題とは何だ高町一等空尉」

「スバル達みたいに、なのはさんって読んで良いよ」

「決めるのは俺だ。アンタじゃない」

言葉は互いに通じているが、どこまでも平行線だ。二人の間に見

えない火花が飛び散っているような気がして、他の三人は事の成り行きをただ見ているしか出来ない。

「はぁ……。君は自分の力を信じているんだろうけど、組織に属するなら上の意見には従わないといけないよ」

「そうか、覚えておこう」

フォルテはその性格と雰囲気のせいで誤解されがちだが、自分が間違っていればちゃんと謝るし、訂正をする。しかし相手が間違っていたり、自分の嫌う事をしてきたなら、止めるまで噛み付く狂犬のような一面を持つ。

素直に言うことを聞いたのが意外だったのか、三人が啞然とする。

「それで、俺はもう帰っていいのか？」

「はいです。後日お渡しする物とかがありますので、その時また来てくださいね」

もうこの場所に用はないと言わんばかりに、早く帰ろうとするフォルテの腕をスバルが掴む。うつとおしそうに払って外そうとするが、スバルの馬鹿力の方が強いらしく、全然外れない。数分間無言でこのやり取りをし、最後にフォルテが折れる事ようやく終わりを告げた。

「少しだけ待ってやるから、さっさと来い」

「うん。また後でね」

今度こそフォルテが廃墟から姿を消す。

「ね、フォルテ優しいでしょ？」

「いや……。あんたが無理矢理意見を通したからでしょ」

ティアナとしては、スバルから逃げたくて一時的にスバルの言うことを聞き、スバルから逃げ出すつもりだと考えていた。待つと言ったが、一秒でも待つ事はないというのが彼女の見解だ。

他の二人も同意見なのか乾いた笑みを浮かべていた。

後日、合格した証などを受け取りに来たフォルテは何故か、なのはと同じく管理局で有名な八神はやたと顔を合わせていた。

「私は八神はやてや。よろしゅうな、フォルテ君」

「フォルテだ、呼び捨てでいい。何で俺がアンタと話をしないといけないのか、教えてもらおう」

一度前に聞いていたとはいえ、フォルテの口の悪さにはやてが一瞬だけ怯む。だが表には出さず、心の中で思い、顔には笑顔を張り付けて話す。

「私は機動六課ちゅう組織を造ろう思てる。つまりは勧誘やな」

「何でアンタじきじきなのかを聞いてもいいか？」

「君は筋が通らない事を嫌いや、って教えてくれた子がおるんよ。せやから、私が勧誘に来たんや」

彼女にフォルテの性格を教えて犯人がすぐに分かり、フォルテは舌打ちした。帰ったらおしおきだと心に誓い、今ははやての対応に集中する。少しでも隙を見せたらヤバイと、彼の本能が告げているのだ。

「……機動六課の存在意義を知りたい」

「私は犯罪による被害を少しでも減らしたいんや。せやから機動六課を“有事に迅速に動くことの出来る部隊”として造りたい」

言葉では何とでも言えると、フォルテははやての目を覗き込む。

人は嘘を言うときまず目に出るので、その些細な変化の見逃すまいという魂胆だが、はやての目に嘘がないのを理解する。フォルテの鋭い視線に臆する事無く、見つめ返してきたその意思は本物だ。

「俺なんかでいいなら、機動六課に配属してくれ」

「ありがとう！」

感極まったのか、はやてがフォルテの手を握って感謝の意を表す。それがスバルを思い出させたのか、フォルテの顔が何とも言えない顔になる。

「ほな、よろしゅうなフォルテ君」

こうしてフォルテの物語は幕を開ける事になる。

## 1話（後書き）

感想・批判をお待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0417y/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 過去を失い強さを求める者 ~

2011年11月16日15時28分発行